埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

A Practical Investigation into Cross-disciplinary learning methods and techniques with Japanese Drum

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2018-08-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 齊藤, 淳子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1138

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

太鼓を素材とした
領域横断的学習の指導に関する実践的研究

齊　藤　淳　子

キーワード：太鼓（和太鼓），領域横断的学習，創作活動

1. はじめに

筆者がこれまでに行ってきた太鼓を扱った授業を振り返ると，「太鼓を叩いた」「楽しかった」という気持ちばかりが残り，何を学習したのかが希薄となりがちであるという課題があげられた。また，太鼓を素材とした「器楽」と「創作」の2つの分野を合わせた実践を行ったことはあったのだが，「鑑賞」領域も合わせて横断的に学習するという実践を行ったことはなかった。

中学校音楽科の時数が1年生で45時間，2〜3年生で35時間と相変わらず少ない状況にあり，限られた時間の中で複数の活動を関連させて行う領域横断的学習が求められることから「太鼓を素材とした創作活動及び器楽・鑑賞」を横断的な領域で行うことはできないだろうかと考えた。そして，太鼓を素材とした「鑑賞」と「器楽」「創作」の活動を関連付けて構成することで，視聴覚教材だけでは決して感じ取ることのできない太鼓の生の音を聴き，本物の太鼓に触れるという稀少な体験をすることで主体的に学習することができるとともに，実際に曲をつくることで〔共通事項〕の「構成」についての理解を深めることができるのではないかと考えた。また，日本と諸外国の太鼓の音楽を比較聴取したり，強弱や打つ場所などの違いによって様々に変わる太鼓の響きや音色を知覚し，その特質を感受することで，日本の太鼓の音楽の良さを生かした創作活動ができるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は，太鼓を素材とした「鑑賞」及び「器楽（太鼓）」，「創作」を領域横断的に学習することが可能であるかを実践的に検討することにある。

3. 研究の方法

領域横断的学習に関する先行研究の検討及び実践した授業の指導案を中心に，ワークシートや映像を用いながら考察を行った。

4. 先行研究

表現と鑑賞を関連付けた実践はたくさんあるが，本研究では，河添達也，多賀秀紀の「中学校音楽科における領域横断型カリキュラム開発」[(1)] について検討した。この中で河添，多賀は，研究の目的を“中等音楽科教育における領域横断型カリキュラム開発の可能性を，中学校音楽科に特化した上で追求することを目的としている。加えて，限られた授業時間数内で 4 つの活動（「歌唱」「器楽」「創作」「鑑賞」）を密接に関連させ，生徒が既存の枠を超えて活動することができる教材を選択するための指針を策定し，その諸課題を明らかにする。”[(2)] とし，附属中学校での授業観察及び年間指導計画の分析と領域横断型カリキュラム開発や授業展開に関する先行研究や実践例，文献で明らかにされている成果と課題について整理した上で，学習指導案モデルを提示している。

指導案モデルを作成するにあたっては，以下の 4 点に留意している

① 各活動を〔共通事項〕によってつなぎ，それぞれにおいて音楽を形づくっている要素を知覚・感受するための学習を取り入れた。

② 授業時間数は設定していないが，概ね 4〜5 時間での展開を想定している。

③ 指導案モデルの様式や評価計画は，国立教育研究政策所が HP 上で公開している「題材の評価に関する事例」を参考としている。

④ 指導案モデルという位置づけであるため，授業展開過程はフローチャートを用いて簡略化している[(3)]。

一例として，「表現と鑑賞による春の響き」という学習指導案が提示されている。

「春」をテーマに，第 1 次は鑑賞で，ヴィヴァルディの「春」（第 1 楽章）と宮城道雄の「春の海」を比較聴取させている。楽器の音色，曲想，奏法に着目して鑑賞し，共通点と相違点を，知覚・感受した内容と関連させてワークシートに記入させている。尚，ワークシートが示されていないため，どのように比較されたのかを読み取ることはできなかった。

第２次は歌唱で，滝廉太郎の「花」を教材として用いている。範唱を聴いた後，全員で斉唱し，前次のワークシートを参考に「花」をどのように表現するかをグループで話し合い，最終的には鑑賞で知覚・感受したことを土台に演奏発表するという活動である。表現の工夫について考える活動は，歌うという表現活動を中心としながら行うべきだと考えるが，この場合は，話し合いが中心であるかのような印象を受けた。

第３次は創作で，引き続き「花」を用い，気に入った１小節を創作のためのモチーフとしている。楽器を選び，モチーフをもとに簡単なアンサンブル曲を創作する活動である。鑑賞や歌唱で知覚・感受したことを土台に創作を行うとしているが，どの〔共通事項〕に着目しているかは読み取ることはできなかった。

第４次は創作作品の発表で，それを鑑賞と位置づけている。音楽を形づくる要素に着目しながら聴く活動ではあるが，学習指導要領にある「鑑賞教材は，我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち，指導のねらいに適切なもの」(4) に当てはまるとは言い難い。

この指導案モデルの作成をする際，“①指導事項の共通性（楽器の音色，曲想，奏法）を聴き取りやすく，これらを表現しやすい楽曲を選択すること”“②共通のテーマをもつ複数の楽曲を選択すること”“③異なる演奏形態をもつ複数の楽曲を選択すること”(5) という３点を教材選択の指針としている。他の指導案モデルは示されていないため，他の題材ではどのようになっているか読み取りきれない部分もあるが，この指導案モデルからは「共通のテーマ」と「歌唱・器楽・創作・鑑賞を密接に関連させる」ということに縛られ過ぎている感があった。限られた時数の中で指導内容をより深めるために４つの分野・領域を関連させながら学習をすすめることは大きな意味があると考えるが，常に４つの分野・領域を密接に関連させるような学習活動では無理が生じてしまうことがあるように感じる。

以上のことから，４つの分野・領域を常に関連させるのではなく，指導内容に応じていくつかの分野・領域を取捨選択しながら関連づけさせる必要があると考えた。

5. 授業実践の概要及び考察

⑴　対象学年　中学２年生（3 クラス／1 クラスあたり 37 名前後）

⑵　実施年月　2012 年 10 月～ 11 月　　2013 年 10 月～ 11 月
　　2014 年 10 月～ 11 月　　2015 年 10 月～ 11 月

⑶　題 材 名　「太鼓の音色を生かしたリズムアンサンブルをつくろう」

⑷　教　　材

・三宅太鼓，族／日本，Samgo-Mu／韓国，ドラムライン／アメリカ（鑑賞）

・野へ 山へ（器楽／太鼓によるアンサンブル曲）

⑸ 題材目標

・太鼓の様々な音色やリズムに関心をもち，意欲的にアンサンブル及び創作活動に取り組もうとしている。（観点 1）

・太鼓の様々な音色やリズムを生かした表現を工夫する。（観点 2）

・太鼓の様々な音色やリズムを生かして演奏表現する技能を身に付けるとともに，表現したいイメージをもってリズムパターンを工夫しながら音楽をつくる技能を身に付ける。（観点 3）

・日本及び諸外国の太鼓の音色や奏法の特徴を比較することで，日本の太鼓の音楽の固有性について考え，そのよさを味わう。（観点 4）

⑹ 題材における学習指導要領の内容（指導内容）

A 表現 ⑵器楽 イ 楽器の特徴を理解し，基礎的な奏法を生かして演奏すること。

⑶創作 イ 表現したいイメージをもち，音素材の特徴を生かし，反復，変化，対照などの構成や全体のまとまりを工夫しながら音楽をつくること。

B 鑑賞 ウ 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して，鑑賞すること。

〔共通事項〕 音色，リズム，速度，強弱，構成（反復，変化，対照）

⑺ 授業にあたって

本題材は，鑑賞と器楽表現，創作の活動を関連付け，領域横断的に学習するものである。

最初に日本の“たいこ”と諸外国の様々な“たいこ”の演奏を教材とした鑑賞を行うことで日本の太鼓の音楽だけに見られる固有性について考え，日本の太鼓の音楽のよさを味わう。

次に器楽表現で太鼓に取り組み，基礎的な奏法を知るとともに，速度や強弱，打つ場所の違いによって様々に変わる太鼓の音色を知覚し，その特質を感受する。そして，「野へ 山へ」という比較的簡単な楽曲に取り組むことでリズムと構成についても知覚し，その特質を感受する。

さらに，鑑賞と器楽の学習の集大成として創作活動に取り組み，表現したいイメージをもって音楽をつくる体験をする。

創作活動の大テーマは釧路町の北側に広がる「釧路湿原」とし，KJ 法的手法を用いながらグループ毎にイメージをまとめる。そして，それらを表すようなリズム（中心となるリズム）を口唱歌でつくり，太鼓を媒体として表現する。その創作作品は，〈はじめ―なか―おわり〉の 3 つの部分からなるものとし，中心となるリズムを「反復」「対照」「変化」と順を追って工夫することで構成について学習しながら作品をつくりあげていくことができるのではないかと考えた。また，太鼓や本格的な創作活動は初めての経験となる生徒がほとんどであるが，上述の〔共通事項〕

について，互いに思いや意図などを伝え合いながら自分達のイメージを作品としてつくりあげるおもしろさを体験させたいとも考えた。

グループによる創作活動は，様々な考えをもつ生徒が集まって一つの作品をつくっていくためそれぞれの思いや意図を伝え合い，認め合い，共有していかなければならない。本活動ではKJ法的手法を用いることでそれぞれの考えを共有したり，順を追って構成を工夫したりしながら作品をつくっていくことを目指した。また，この題材を通して日本の太鼓の音楽のよさを味わうとともに，ほんの少しの工夫であっても曲の雰囲気がかわることを体験させることで，創意工夫することのおもしろさを味わい，思いや意図をもって主体的に音楽をつくろうとする力を養いたい。

(8)　題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
①　日本及び諸外国の太鼓の音色や奏法の違いなどに関心をもち，意欲的に聴き取ろうとしている。 ②　意欲的にアンサンブル活動に取り組もうとしている。 ③　太鼓の音色や音の特質，リズムの掛合い，オリジナルのリズムパターンをつくることに関心をもち，創作活動に取り組もうとしている。	①　太鼓の様々な音色を知覚し，その特質を感受している。 ②　表現したいイメージをもって構成を工夫している。 ③　リズムの特徴や太鼓の様々な音色を知覚するとともに，その特質を感受したことを生かした表現を工夫している。	①　リズムの特徴や太鼓の様々な音色と特質を生かして演奏表現する技能を身に付けている。 ②　表現したいイメージをもって，言葉がもつリズムの特質を生かしたリズムパターンの組み合わせなどを工夫しながら音楽をつくる技能を身に付けている。	①　日本及び諸外国の太鼓の音色や奏法の特徴を知覚しながら聴いている。 ②　それぞれの楽器を比較することで，日本の太鼓の音楽の固有性について考え，そのよさを味わいながら聴いている。

(9)　題材の指導計画・評価規準

次／時		○学習内容　　・学習活動	具体の評価規準（評価方法）
第1次	第1時	○日本（三宅・族）とアメリカ（ドラムライン），韓国（Samgo-Mu）の太鼓の演奏を視聴する。 ・それぞれの演奏の特徴を知覚し，その特質を感受する。	関　各国の太鼓の演奏に関心をもち，意欲的に聴いている。（観察・ワークシート） 鑑　各国の太鼓の演奏の特徴を知覚しながら聴いている。（ワークシート） 鑑　各国の太鼓の演奏を比較し，日本の太鼓の特徴を知覚し，その特質を言葉で表す。（ワークシート）
第2次	第2時～第3時	○ケガ防止のため，太鼓の演奏に必要なストレッチなどを行う。 ○太鼓の基礎的な奏法に取り組む。 ・撥の持ち方や打ち方，立ち方・姿勢，掛け声などを意識しながら取り組む。	

第2次	第2時〜第3時	・口唱歌と地打ちの基本を学び，今後の活動の見通しをもつ。 ・奏法の違いによって音色や音の特質，雰囲気が変わることを知覚し，その特質を感受する。	創 打ち方を変えることによって音色や音の特質，雰囲気が変わることに気付き，その特質を自分の言葉で表す。（ワークシート）
		○《野へ 山へ》の範奏を聴き，アンサンブル活動に取り組む。 ・リズムの特徴を知覚し，その特徴を生かすとともに太鼓の基礎的な奏法も意識しながら演奏する。	関 意欲的にアンサンブル活動に取り組もうとしている。（観察） 技 リズムの特徴を生かして演奏表現しようとしている。（観察）
第3次	第4時	○大テーマ「釧路湿原」について話し合う。 ・「釧路湿原」から思い浮かぶこと，思いついた事柄を付箋に書き，模造紙に貼り，グルーピングする（KJ法）。 ・付箋の中からいくつかの言葉と選択し，それを表わすような口唱歌を考える（個人）。 ・各自のつくったリズムをグループ内で交流し，それらを生かして中心となるリズムパターンをつくる（グループ）。 ・表現したいイメージに合うよう，曲の構成「反復」の回数を考える。	関 オリジナルのリズムパターンをつくることに関心をもち，意欲的に創作活動に取り組もうとしている。（観察・付箋） 技 表現したいイメージをもって，言葉がもつリズムの特質を生かしたリズムパターンを工夫しながら音楽をつくろうとしている。（観察・ワークシート）
	第5時〜第6時	○表現したいイメージに合うよう，曲の構成「変化」を考える。 ○全てのグループが創作活動の途中経過を発表する。 ・中心となるリズムと変化をそれぞれ1回ずつ演奏する。 ・他のグループのよいところを探しながら発表を聴く。	創 表現したいイメージをもって構成を工夫しようとしている（観察・ワークシート）
		○表現したいイメージにあうように，〈なか〉の部分の流れを考える。	
第4次	第7時	○曲の始まり方と終わり方を決める。 ○地打ちを決める。 ○速度や強弱，音色，掛け声を工夫する。	関 意欲的に活動に取り組もうとしている。（観察） 創 太鼓の様々な音色の特質を生かした表現を工夫しようとしている。（観察・ワークシート） 技 表現したいイメージをもって，様々な工夫をしながら音楽をつくろうとしている。（観察・ワークシート）
	第8時	○本発表会を行う。 ・他者評価及び自己評価を行い，お互いのよさを認め合う。 ○曲目解説をつくる。 ・自分達の作品について振り返る。	技 リズムの特質を生かしたリズムパターンの組み合わせなどを工夫しながらつくった作品を表現しようとしている。（観察，自己評価） 創 構成の工夫やリズムの掛合い，太鼓の様々な音色を生かした表現についてわかりやすく説明しようとしている。（ワークシート）

⑽　公開授業研究会時の本時の学習について

本研究は，平成24年度北海道音楽教育研究大会釧路大会（以下，全道音研という）にて公開した授業を出発点としている。公開した授業は，全8時間の中の5時間目である。グループ毎に創作作品を一通りつくり，途中経過を発表する場面である。その指導案は次の通りである。

①　本時（公開授業）の目標（5／8時間）

表現したいイメージをもって構成を工夫しようとしている。【音楽表現の創意工夫】

②　本時の展開

○主な学習内容　・学習活動	□教師のかかわり　◇評価 ◆支援を要する生徒への手立て
○前時までの学習を振りかえる。 ○今日の学習について知る。	□曲の構成「反復」について確認する。 □本時の授業の流れについて説明する。 □曲の構成「変化」について説明する。
表現したいイメージをもって曲の＜なか＞の部分の構成を工夫しよう	
○自分達の表現したいイメージに合うよう曲の構成「変化」について考える。 ・中心となるリズムを3〜4か所「変化」させる。 ・「変化」させた部分について，表現したいイメージと照らし合わせて，なぜそのような「変化」を考えたのか理由を説明できるようにする。	□自分達の表現したいイメージに近づけるため，「変化」を加える。但し，中心となるリズムパターンが全く違うものにならないよう留意する。 ◇表現したいイメージをもって構成を工夫しようとしている。（楽譜・ワークシートの記入・観察） ◆表現したいイメージと照らし合わせて，「何を表現したいのか」を確認し，それを表現するにはどのような「変化」させたらよいのかを一つずつ確認する。
○全てのグループの発表を聴く。 ・「変化」させた小節を全体に伝える。 ・「変化」させた理由を全体に伝える。 ・中心となるリズムと変化をそれぞれ1回ずつ演奏する。 ・他のグループの良いところや自分達のグループの工夫に生かせそうなことを探しながら発表を聴く。	□途中経過の発表は，元のリズムからどのように変化したのかを聴き取るようにするため，中心となるリズムと「変化」をそれぞれ1回ずつ演奏する。その際，「**カウント4拍→中心となるリズム→カウント4拍→変化**」で演奏することを約束ごととする。 □全てのグループに途中経過を発表させる。他のグループの発表を聴き，「変化」を知覚するとともに，よいところや自分達の作品に生かせるところなどを評価用紙に記入する。
○自己評価 ○次時の学習内容を確認する。 ・「対照」について考え，〈なか〉の部分を完成に近づける。	□本時の創作活動について振りかえる。 □次時は「対照」について説明をし，自分達の表現したいイメージに近づけるには，「反復」「変化」「対照」をどのような順番で演奏していくとよいのかを考え，〈なか〉の部分を完成に近づける。

⑾　ワークシート

①　KJ 法的手法を用いグループで作成したワークシート

KJ 法とは川喜田二郎が，その著書『発想法』[6] で提案した方法で，概念を整理する場面などにも用いることができるため企業や教育の世界で普及している。特に教育の世界では，目標分析や教材研究，授業分析，プレゼンテーションや論文，報告書などの作成する場面でも有効な方法であるといえるため，学校教育で行われる探究的な学習活動での手法として用いられている。

次の図 1 及び図 2 は，大テーマ「釧路湿原」をグルーピングによってまとめられた例である。本研究では創作活動を行う際に，グループでイメージをまとめるために用いているため，本来の KJ 法で行われるような図解化や文章化，口頭発表などによる他グループとの意見交換は行っていない。

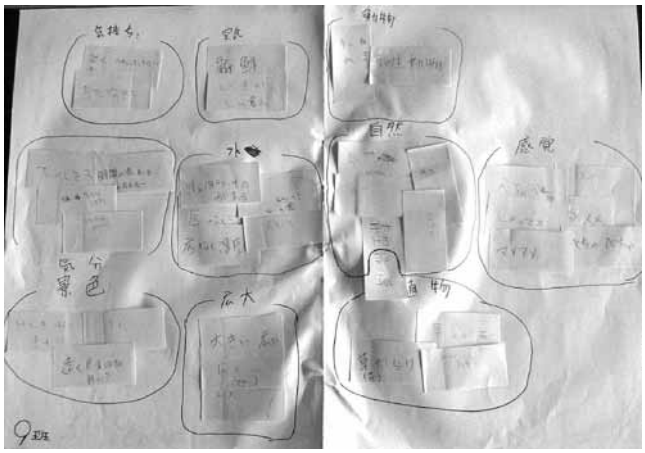


図 1　KJ 法によってまとめられたワークシートの一部①

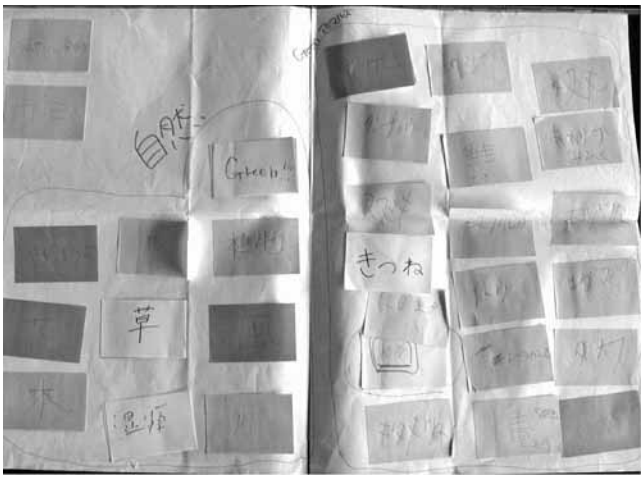


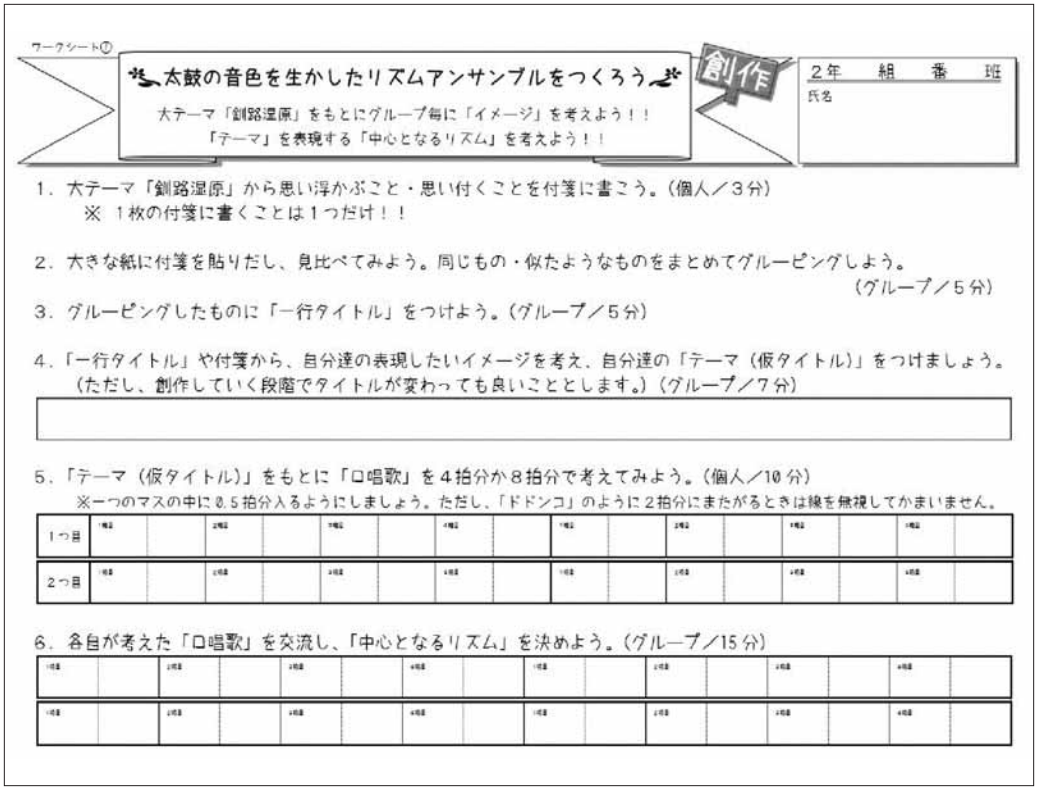
図 2　KJ 法によってまとめられたワークシートの一部②

一人ひとりが考えたキーワードを持ち寄り，グルーピングすることでグループ内のキーワードが絞り込まれる。それをもとにグループでどのようなイメージを持って表現するかを考えテーマ（仮のタイトル）を作る。

② 個別に記入するためのワークシート

KJ 的手法によって考えられたテーマ（仮タイトル）をもとに，イメージを表現するような口唱歌を個別に考え，図 3 で示したワークシートに記入をする。その際，長いものを考えるのではなく，4 拍分か 8 拍分という短いフレーズをいくつか作るようにする。この創作作品は個人の作品ではなく，グループでの作品となるため，個人で長いものを作るよりも短いものを持ち寄り，話し合いながら作ることで，グループメンバーのそれぞれの考えを盛り込むためである。

個別に考えた口唱歌のリズムを実際に打ちながら，グループの「中心となるリズム」を決めていく。その際，次頁の図 4 のワークシートに，より具体的なイメージを記入することで，口唱歌がただの言葉の羅列にならないように気をつけるようにする。具体的なイメージは，グループメンバー全員が共有できるものであれば文章でまとめずとも箇条書きでもイラストでもよいこととした。


ワークシート①

太鼓の音色を生かしたリズムアンサンブルをつくろう

創作

大テーマ「釧路湿原」をもとにグループ毎に「イメージ」を考えよう！！
「テーマ」を表現する「中心となるリズム」を考えよう！！

2年　組　番　班
氏名

1．大テーマ「釧路湿原」から思い浮かぶこと・思い付くことを付箋に書こう。（個人／3分）
※ 1枚の付箋に書くことは1つだけ！！

2．大きな紙に付箋を貼りだし、見比べてみよう。同じもの・似たようなものをまとめてグルーピングしよう。
（グループ／5分）

3．グルーピングしたものに「一行タイトル」をつけよう。（グループ／5分）

4．「一行タイトル」や付箋から、自分達の表現したいイメージを考え、自分達の「テーマ（仮タイトル）」をつけましょう。
（ただし、創作していく段階でタイトルが変わっても良いこととします。）（グループ／7分）

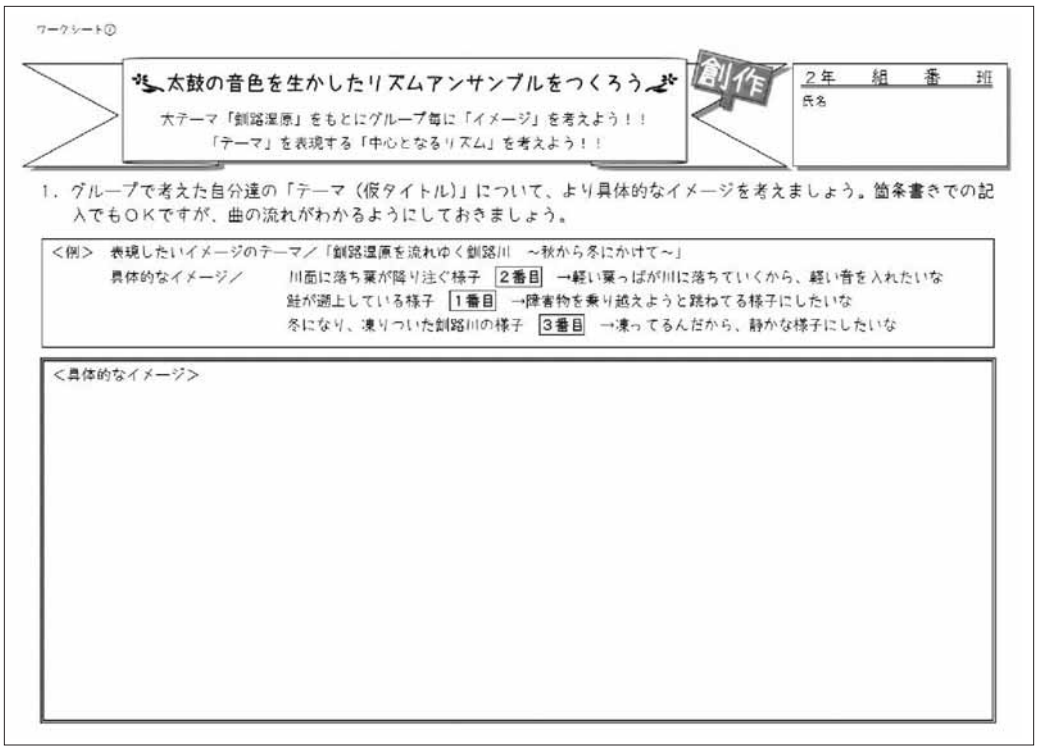
5．「テーマ（仮タイトル）」をもとに「口唱歌」を4拍分か8拍分で考えてみよう。（個人／10分）
※一つのマスの中に0.5拍分入るようにしましょう。ただし、「ドドンコ」のように2拍分にまたがるときは線を無視してかまいません。

1つ目	1拍目		2拍目		3拍目		4拍目		1拍目		2拍目		3拍目		4拍目
2つ目	1拍目		2拍目		3拍目		4拍目		1拍目		2拍目		3拍目		4拍目

6．各自が考えた「口唱歌」を交流し、「中心となるリズム」を決めよう。（グループ／15分）

1拍目		2拍目		3拍目		4拍目		1拍目		2拍目		3拍目		4拍目	
1拍目		2拍目		3拍目		4拍目		1拍目		2拍目		3拍目		4拍目	

図 3　個別に記入するためのワークシート


ワークシート②

太鼓の音色を生かしたリズムアンサンブルをつくろう

創作

大テーマ「釧路湿原」をもとにグループ毎に「イメージ」を考えよう！！
「テーマ」を表現する「中心となるリズム」を考えよう！！

2年　組　番　班
氏名

1．グループで考えた自分達の「テーマ（仮タイトル）」について、より具体的なイメージを考えましょう。箇条書きでの記入でもＯＫですが、曲の流れがわかるようにしておきましょう。

＜例＞　表現したいイメージのテーマ／「釧路湿原を流れゆく釧路川　～秋から冬にかけて～」
具体的なイメージ／　川面に落ち葉が降り注ぐ様子　2番目　→軽い葉っぱが川に落ちていくから、軽い音を入れたいな
鮭が遡上している様子　1番目　→障害物を乗り越えようと跳ねてる様子にしたいな
冬になり、凍りついた釧路川の様子　3番目　→凍ってるんだから、静かな様子にしたいな

＜具体的なイメージ＞

図4　キーワードからイメージを具体化するためのワークシート

③　グループで作成した拡大楽譜（ワークシート）

「中心となるリズム」が決まった後は，次の図5で示すようなＡ2版のポスターサイズのワー

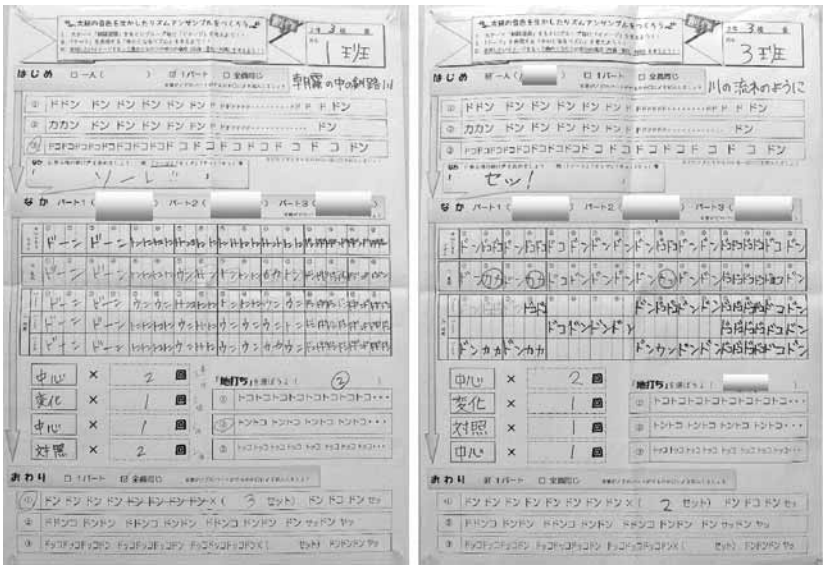


図5　グループで作成した拡大楽譜（ワークシート）の一部

クシートを拡大楽譜として作成した。この拡大楽譜（ワークシート）には，自分たちで考えた「中心となるリズム」だけでなく，曲の“はじめ”と“おわり”の部分や伴奏となる「地打ち」など，曲の構成や工夫に関わるもの全てを記入できるようにし，これを見ると全員が一緒に演奏できるものとした。

④　自分達の作品を振り返るために用いたワークシート（曲目解説／個人）

最後の発表会では，各グループで創作した作品をお互いに発表し合い，他者評価及び自己評価をするとともに，自分達の作品を振り返ることで〔共通事項〕の「構成」についての理解を深める（図 6 参照）。そして，最終的には自分達の作品の曲目解説を作成するのであるが，その際に「どのようなことをイメージしたり，表現したのか」「どのような工夫をしたのか」「構成」「反復」「変化」「対照」「工夫」「中心となるリズム」という内容または語句を必ず用いることと 200 字以上 400 字以内という条件をつけることで，「太鼓を叩いた」「楽しかった」という感想で終わらず，この活動を通して学びの定着を図った。

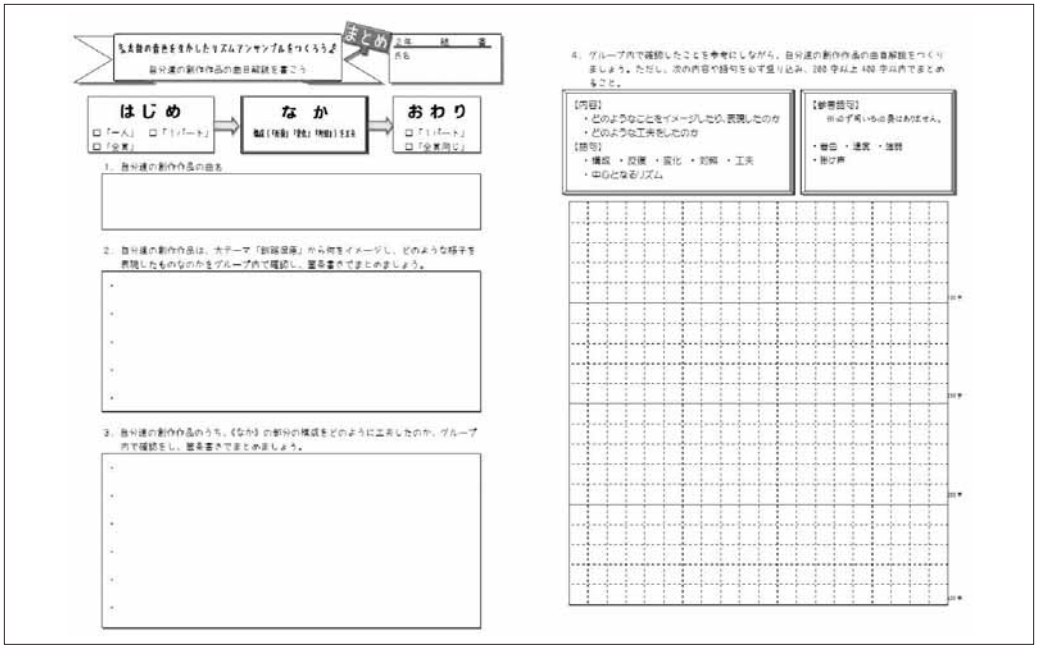


図 6　まとめで用いたワークシート

6. まとめと今後の課題

本研究では，太鼓を素材とした「鑑賞」及び「器楽（太鼓）」，「創作」を領域横断的に学習することが可能であるかを実践的に試みた。

太鼓や本格的な創作活動は初めての経験となる生徒がほとんどであったため，みんなワクワクとした気持ちでこの題材に取り組みはじめた。これまでに行ってきた太鼓を扱った授業の反省のように，何を学習したのかが希薄とならないよう，本題材を進めるにあたってはどの活動においても常に〔共通事項〕（音色・リズム・速度・強弱・構成）が意識できるようにした。特に創作活動においては，KJ 法的手法を用いることで発言が苦手な生徒も自分の考えなどを他者に伝えやすいようにしながら，グループで表現したいイメージの共通理解を図った。そのうえで「中心となるリズム」をつくり，「構成」を工夫しながら作品をつくり上げていった。そして，「反復」「変化」「対照」という「構成」の工夫を，実際に作品をつくりながら体験することで，それらの理解が促されたと考える。また，グループ活動は話し合いや作品づくりだけでなく，発表するために練習の際には得意な生徒がミニティーチャーとなって苦手な生徒を教えることで，技能差を縮めることができ，最終発表会では，生徒達はとてもいい表情で演奏することができていた。

本研究は〔共通事項〕を軸に，鑑賞と器楽，創作の活動を関連付けた取り組みであり，生徒が主体的に活動できるよう配慮されているとともに，創作活動の大テーマを「釧路湿原」とすることで地域に根差した学習とした。グループでの学習において KJ 法を用いながら取り組むことで，発言することの苦手な生徒も意見を示しやすいように工夫した。

口唱歌や言葉，太鼓を用いた表現は，音楽を通してコミュニケーションを図りながら「思考・判断・表現」する力を育むことにもなり，今，求められている音楽科としての学力の定着を図る取り組みであるともいえる。創作活動は，生徒が自らの感性や創造性を発揮しながら自分にとって価値のある音や音楽をつくり，協同的な喜びを実感できる活動でもある。また，生徒の表現をよく聴き，生徒の発想を大切にしながら授業をつくっていくことは教師の感性を高めることにもつながる。さらに，音楽活動を充実させるためには「音楽的な約束事」が必要であり，ねらいを踏まえて様々な発想ができるように指導することが，創意工夫しながら音を音楽へと構成することにもつながる。本題材のようなグループ活動であっても，様々な意見をもとに実際に音を出しつつ試行錯誤しながらつくることに意義があり，発想が広がる基盤となる。言語活動を取り入れることによる効果は音楽についての思考力・判断力が高まるということと，言語を介した音楽的なコミュニケーションが充実するということである。自分が感じ取ったことを言葉で表すなどして友達と意見交流することで，いろいろな感じ方があることに気付いたり，自分の考えを広げたりすることにつながるのである。

以上のことから，太鼓を素材とした学習は「鑑賞」及び「器楽」「創作」を領域横断的に学習することができるといえる。また，本研究での学習活動は，先行研究での学習活動とは違い指導内容に応じていくつかの分野・領域を取捨選択しながら関連付けさせることで無理なく学習を進めることができた。

本研究では，様々な工夫の中でも特に〔共通事項〕の「構成」に焦点を絞り，「反復」「変化」「対照」を同時に考えるのではなく，一つずつ順を追って工夫を試みることで「構成」についての理解を深めることができたと考える。しかし，自分たちが表現したイメージを常に持ち続けながら工夫をしていくということが難しく，なぜ「変化」させなければならないのか，という必要感を持たせなければ，技術偏重傾向に陥ってしまうという課題が浮き彫りとなった。

今後は，自分達の表現したいイメージから離れることなく表現活動を行うため方策について検討していく。

引用文献及び参考文献・参考 web 資料

（1） 河添達也，多賀秀紀（2009）「中学校音楽科における領域横断型カリキュラム開発」『教育臨床総合研究 8 号』島根大学教育学部附属教育支援センター HP,〈http://www.edu.shimane-u.ac.jp/_files/00100328/2009-012.pdf〉2012 年 2 月アクセス
（2） 同上書，p. 154
（3） 同上書，p. 159
（4） 文部科学省『中学校学習指導要領解説　音楽編（平成 20 年 9 月）』教育芸術社，pp. 83-84, 2008
（5） 河添達也，多賀秀紀（2009）「中学校音楽科における領域横断型カリキュラム開発」『教育臨床総合研究 8 号』，島根大学教育学部附属教育支援センター HP, p. 163
（6） 川喜田二郎『発想法 ── 創造性開発のために ──』中央公論新社，1967

（提出日　2017 年 9 月 29 日）